

野党一本化で総選挙勝利を目指す市民集会 議事録



●開催日時／2016年4月30日(土) 13:30～16:05

●会場／三茶しゃれなあと 5階 オリオン

◆出席者(部分参加を含む)

総勢 138名(政党関係者、報道関係者を含む)

○ 司会を共同代表・鈴木国夫さんが務め、集会をすすめた。

第1部

1) 鈴木さんが開会挨拶、および本日の集会のプログラムを紹介した。

2) 共同代表である齋藤優子さんからめぐせたの設立の経緯と本集会の趣旨を話した。

目黒区在住で東京5区。安倍政権の暴走に対してはみなさんも本当に危機感を持っていて、ここに集まっていると思う。夏の参議院選挙で2/3を取らせてはいけない、私たちは崖っぴちに立たされていて、危機感があると思う。野党は今までのようにバラバラで、「統一しなければ勝てない」という雰囲気はだんだん出てきている、と思う。世田谷には世田谷勝手連、目黒でめぐろ・せたがや勝手連というのがあり、目黒区長選挙でも取り組みました。元々参議院選挙のために作ったが、最終的には政党間の調整をするのに市民団体が必要で、政党間の仲立ちをするにも大きな仕組みとして市民団体が必要なので、「市民連合 めぐろ・せたがや」を4月1日に発足させた。本日の集会の位置づけです。ご存知のように、参議院選挙において32の一人区過半数で一本化が進んでいる。手元資料の代表的な政策協定を載せた。今どのような協力が進んでいるかがわかる。これは参議院選挙のことだが、衆議院でも同様のプロセスとして一本化を準備しておかなければ、同時選挙の場合間に合いません。まず第一ステップとして、一本化に向けて「市民、政党で話し合いを進めることを確認する」のが、本日の集会の目的です。

3) 高田健さん(戦争させない・9条こわすな!総がかり行動実行委員会)講演

総がかり行動実行委員会、また市民連合の運営委員もやっております。ご存知のように市民連合は

5つの団体で構成されていて、その中のひとつが総がかり行動実行委員会、総がかり行動実行委員会の方から出ている運営委員ということで、あちこちに行っていますので、実際今日お出での方々には、いろんな運動の現場で顔をあわせている人がいて、いろんなところで私たち話をしているとすけれど、与えられた時間のなかで市民連合の可能性をについてお話をしておきたいと思います。

最初に 2015 年安保の特徴なんですけども、市民連合というのは 2015 年安保闘争の中から生まれた運動でありまして、私は 2014 年から 15 年にかけての集団的自衛権の解釈変更と、そして戦争法の強行と、これに反対する市民運動には非常に大きな特徴があったというふうに思っています。いろんな方がこの運動について話をしていますが、例えば上野千鶴子さんなどは、「2015 年、この国の政治の運動の文化が変わった。」などと評価して、これは最大級の評価だと思いますけれど、私も大体そういうふうに思っています。大きな変化があった、その変化がどういうものだったか、ということはこの参議院選挙なり、あるいは衆議院選挙なりを考えていくうえで確認をしておく必要があるかなと思っています。私は 4 つ特徴があったと思っています。



第一番目は、「総がかり」ということです。総がかり行動の固有名詞ではなくて、総がかりの運動だったということが大きな特徴だったと思います。60 年安保以来様々に日本の反戦平和運動、民主運動がいろんな、やむを得ず対立、分裂をしてきたわけですけれども、時には「一日共闘」あるいは「時間共闘」というのもありましたけれど、今回総がかり行動実行委員会のように、この「安保法制を廃止するんだ」、「戦争法をなくすんだ」、というそういう大きな狙いで長期の共同の機関を作ったというのは、この数十年で初めてなんです。これは大変大きな変化だったと思っています。

二番目の特徴は、この運動全体が非暴力の市民行動として広範に展開されたことが、私は大きな特徴だったと思っています。この中にたくさんの大量の市民が運動に参加をしてきた、それまでの私たちの運動では、そうした反戦平和の運動というのは、どうしても労働組合さん、あるいは様々な民主団体さん、そういう人たちが中心になって運動をやる、市民は脇の方にそれについてるというパターンが多かったわけですね。60 年安保の時に「声なき声 (の会)」というのがありましたし、70 年安保で小田 (実) さんたちの「べ平連」というのがあります、日本の市民運動の伝統というのもそれなりにあるんですけれども、今回の 15 年安保ほど大量に本格的に市民が登場したというのは、私は、この何十年で初めてだというふうに思っています。理由はいろいろあるんですが省きます。

そして、それらの中で、その運動が今日まで継続していることが非常に大きな特徴だと思うんです。60 年安保、70 年安保、あるいはそのほかの様々な運動、その運動を阻止する闘争、反対闘争を、様々な私自身もやってきましたけれども、それが強行されたり、あるいは法律が成立したりすると、なかなかその運動、後は運動は継続しない、あの秘密保護法のみなさんは今すごくがんばっているんですけれども、そういう運動がなかなかなかったんですね。60 年安保の後、結構挫折感を味わった方はたくさんいると思いますし、70 年安保の後も全学運動は非常に悲惨な状態になったことなどを考えてみますと、今回の 9 月 19 日以降の運動の継続というのは、私は本当に大変なものだ、と思ってるんですね。9 月 19 日以降、あまり敗北感がないね、挫折感がないね、と言ったことが結構あるんですけれど、別に極楽とんぼの意味で言っているのではなくて、実際に運動圏が全国でその後も継続しているというのは、私は素晴らしいことだと思うんですね。今でも、お出でになっ

ている通り国会の周辺には1万人近くの人たちが要所要所の時には集まる。今度の5月3日にはたぶん去年の3万人を大きく超える多くのひとびとが集まってくる。運動で戦争法が強行されましたけれども、多くの人たちが「これで終わりじゃない、この後さらに私たちの運動は続くんだ」確信を持っているところが非常に大きいと思います。

そして4番目の特徴ですけれども、これも市民運動としてはなかなか従来はやってこなかったんですけども、この運動2年間の出発の時点から、野党のみなさんとの連携というのを非常に大事にしてきた。なんとかして、国会の外で私たちは闘うけれども、同時に国会の中でこの安倍政権の戦争法に反対する闘いを野党のみなさんにやってもらいたい。そういう願いがありまして、当初から一貫して野党のみなさんに働きかけ、あるいは連携を重視してきたという特徴があったと思いますね。総がかりで市民運動が全体で大きく連携したわけですから、そのそうがかりの中には、非常にざっくりばらんに言っちゃえば、当時の民主党さんを支持する人たちもいたはずだし、共産党さんを支持する人たちもいたはずだし、社民党あるいは生活、様々な政党、あるいは無党派、そういう人たちがいたと思うんですね。それが総がかりでみんな一緒になってるわけですから、国会の中でも共同してやれないわけがない。やれないわけではなくて、やって、安倍政権と闘ってもらいたい。それが一貫したこの2年間の運動の要求で特徴だったと思います。市民運動がこれほどまでに国会内の各政党のみなさんと本格的な連携を追求したというのも非常に珍しい、私も自分で照れくさいぐらいなんですけれども「野党がんばれ！」というシュプレヒコールをやるわけですね、昔やったことがないんですね、(笑) 私個人でいうと。それから「野党は共闘！」とか、「まあ、ほんとにこういうことを私自身も言うようなことになったわい」と思いながら言ってるような、(笑) そういう特徴がありました。そして現実には、野党のみなさんが国会の中で結束して闘っていただいた、という点も非常に大きな特徴だったんだろうと思います。

そして9月19日のあの未明の採決ですけれども、覚えてますけれども、あれ以降、私たちはこれからこの運動をどうやって継続するかというのを、実際にこの運動を担ってきた多くの団体と話し合いをしながら、とりわけ民主党の枝野さんが市民運動と政党の協議の場というのを何回か提案をして、私もそういう場に行ったんですけれども、その場に参加していたのは5つの団体だったわけですね。総がかり行動、SEALDs、学者・文化人の会、それから立憲デモクラシーの会、ママの会、この5つが枝野さんに呼ばれて、当時野党各党みんな来ていましたけれど、その協議の場を作った。そういう中で、しかしなかなかそういう協議の場があっても、野党各党の連携というのが進まないんですね、何回か会談を繰り返すんですけれど、このまま続けていてどうなるだろうか、参加をしいながら私たちも非常にあせりました。それで市民は、ここで参加している市民たちは独自にやっぱり市民のプラットフォームを作ろう、そうすることによって野党のみなさんときちんと話をしていこう、そういうことでそこで参加していた5つの団体が昨年12月の半ばに市民連合というのを作った、というのがこの間の経過であります。で、どういう方針を掲げるかというのをいっぺん議論して、こちらでも議論されていることとほぼ同じだと思いますけれども、当然戦争法は廃止する、それから閣議決定に反対する、それだけではなくて、安倍政権の、個人の尊厳を破壊する様々な政策に反対していこう。ですから戦争法に反対するだけではなくて、個人の尊厳を破壊する、民主主義を破壊するそうした政策に反対していこうという点を、大きな枠組みで一致して市民連合は出発をしました。この中には政治的立場でいえば様々な立場があったと思いますし、個

人のみなさんは、学者さんは15,000人もいるわけですし、だからそう簡単じゃない広範な人たちが結集してますから、いろいろ意見の違いもあると思うんですけども、以上申し上げたような3つの点で大きく団結をしていこう、ということで始めたわけです。

そして、とりわけ考えたのは、その当時は7月に参議院選挙がある。ダブル選挙というのは想定していませんでしたけれども、この参議院選挙で一人区の全国32ある一人区で、ここで野党の統一候補を作れるかどうかというのがカギだと考えましたから、野党のみなさんに、とりわけ32の一人区で統一候補を出すようにしてもらおうと、この働きかけを強めるようにしました。私たちが、中央の各政党に対してこういうふうに取り組んでいるのと相前後して、全国各地でも様々な動きが起きたのはご存知の通りです。そして、そういう中でこの32の一人区で勝利するかどうかというのが非常に大きい。そのためにはバラバラに各政党が候補者を立てていたのではダメで、統一候補を立てる以外にない。申し訳ないけれども、ほとんどの選挙区で民主党さん単独で、あるいは共産党さん単独で勝てるという選挙区は非常に少ない。まあ民主党さん現職の議員さんもおられますから、それだけではないんですけども、しかしこの32の選挙区で安倍内閣の与党と対決していくためには、やはり統一していく以外に私たちには道がない、というごく当たり前のことを考えたわけですね。世田谷・目黒の人たちもご苦労されていると思いますけれども、このアタリマエのことがなかなかアタリマエにならないのが、永田町のみなさんのむずかしいところで、私たちから見ると、なんとかなるんじゃないか、と思いながら、しかし一日がズルズル過ぎるような局面もありました。



とりわけ先日の衆議院の北海道5区と京都3区の運動ですけれども、32の参議院の一人区を統一していくうえでも、この二つの補欠選挙はとりわけ大事だということで、去年の12月段階から私自身も北海道の市民運動の仲間と相談しながら、なんとしても北海道5区で統一候補を立てたい。それがいわば、あまり戦争用語で良くないんですけども、前哨戦になるのではないかと、そういう意味で何としてもこの北海道5区と京都3区で勝ちたいということで、北海道のみなさんと連携をしながら運動を強めてきました。結果として現実にご存知の通りです。この総括については北海道のみなさんがいま大変な議論をしているところで、こちらから見た数字のことで分析して、それでよくわかる、というようなレベルの問題ではない、というのを私は非常に痛感しています。本当に複雑な事情があり、やっぱり現地の現場の運動に即した総括をしないと、私たちの総括は間違ってしまう。選管が発表した数字をあれこれいじって検討するのはもちろん必要で、これは大事なことなんですけれど、それはそれだという限界つきで私たちはこの北海道5区選挙の総括をやっておく必要があるんじゃないか、北海道5区の仲間たちは今、真剣にその議論をやっています。大変な善戦をしたわけです。その評価についてもいろいろあります。前の衆議院選挙の自民党・公明党の票と、結局前の衆議院選挙の民主党と共産党の票とを結局合わせただけの数字ではないか、どこまで市民と野党の結束というのが効果を表したんだ。Internetなどを見ますとそういう疑問、たくさん議論があります。今申し上げたように、そんなに単純な問題ではないな、と私は思ってますね。8つの自治体の中で、それぞれの自治体に特徴があって、とりわけ自衛隊が非常に強い自治体とかそういうのがある。じゃあ自衛隊強い自治体で私たちの方が負けたのか、というと、必ずしもそうではない。じゃ、どうしてそういうところで私たちの仲間たちが巻き返せたのか？あるいは、例のよく言われる、民主党と共産党と野党が一緒になったら共産党アレルギーが出て、中間層あるいは無党派層の

票が逃げてしまうのではないかという、こういう話もずうっとあって、結果としてそういうことはなかったと言う人が多いのですけれど、これも「なかった」というだけでもないんですね。あの、鈴木宗男の「大地」が離れたのはやはりその影響でもありますから、そしてあの前回の選挙は、あの鈴木宗男の大地は民主党の応援をしているわけですから。そういういろいろ考えて、簡単に「いや、大した影響はなかったよ。」と居直ることもどうかと思います。もっともっと丁寧な分析をしてこの北海道 5 区の教訓というものをこれからの参議院選挙における私たちの教訓として引き出すことが大事なんじゃないかなというふうに思っています。ただ、いずれにしても今回、この北海道 5 区の闘いは 12 月の末からようやく候補者を大体市民運動が選定をして、そして野党の合意ができたのは 2 月段階ですよ、わずか 2 ヶ月という中でこれだけの闘いをした北海道の仲間たちの運動というのは本当に経験の宝庫だというふうに私は思っていて、全国のこれから参議院選挙を闘おうとしている仲間、あるいは野党共闘をさらに推進しようとしている仲間たちが、ここから非常に学ぶ必要があるんじゃないかなと思っています。ただ、一点だけ私と私の友人たちの感想を言っておきますと、あの熊本地震の真っ最中に「チャンスだ！」と言ったとんでもない政治家、アホがいましたけれども、ある意味であの人物の発言というのはまんざら当たってなくもないんですね、やはり彼らにとっては今回の地震は選挙に非常に有利に働いたという面がある。私たちの方がそこで正面切って安倍政権を批判しにくくなった、そのこと自身どうなのか、という検討も必要なんですけれど、しにくくなったのは事実なんですね。ましてあそこには、あの北海道 5 区というのは自衛隊が非常にいるところ、そういうところのそういう選挙区で、この大震災にどう対応していくのかという非常にむずかしい、たぶんこれから私たちが一つ一つの選挙をやっていく中で、たくさんぶつかっていく非常に大事な問題が、この中にはあったように思っています。私はもっと安倍政権に対する批判をやってよかったんじゃないかな、と私は思っていますし、だんだんに安保法制に対する意見というの、発言のスペースの中で少なくなっていくのをえなかった、北海道のみなさんの苦労が非常によくわかりながら、それでも、どうだったんだろう、北海道のみなさんと議論してみたい、などと思うことは、あえて東京の、こっちにいる目からいえば、まだまだ議論をしなきゃいけないことはいっぱいあるかな、というふうに思っています。ぜひとも今日、目黒・世田谷のみなさんとも一緒にこれから北海道 5 区選挙というのは、ほんとに一緒に分析をしていきたいと思っています。

京都 3 区に関しては、私は残念です、率直に言って。やっぱり、どうして統一候補にならなかったのか？勝ったからいいようなものの、やっぱり勝てばいいというだけではなくて、どうやってこの時期に安倍政権に共同して、対抗していくのか、という点では京都 3 区は、市民運動もあれこれ統一への努力はしたんですけどもううまくいかなかった。共産党さんが自主投票ということで自分たちの候補を下すというかたちで、選挙に対応するしか今回の道はなかった。こういうことをこれからこの 32 に選挙区で繰り返したくない、私は、京都 3 区は勝った選挙ですけどもつくづくそう思います。これはほんとに幸いだった、ということではしかないんだと思うんですね。市民運動の仲間たちは、非常に京都 3 区の運動はやりにくかったと。ですから、安倍政権を勝たせるな、ということと、選挙に行こうと、こういう運動に止まらざるをえなかった、と言う京都の市民運動のメンバーたちがいるんです。民進党と共産党のそういう問題がありましたから、市民運動の立場でなかなか候補者を支持するという運動がやりにくかったというようなことがありまして、



これは本当に繰り返すことはできないんじゃないか、というふうに思っています。

それで、その 32 の参議院選挙の選挙区の問題ですけれども、これは報道や政党によって分析はいろいろ違います。どこまで統一ができたのか、どこまで進んでいるのか、いろいろそれぞれの政党さんの立場でいろいろ違うんだと思いますけれども、私はだいたい 25 ぐらいのところではほぼ見通しはついた、と思っています。この後の 7 つぐらいのところについても、多少時間がかかるにしても、ほぼ全部でとにかく野党が共闘するという状態を作りたい。すくなくとも京都 3 区のような状態のところには止めるようなことは本当にしたくない。なぜなら本当に今度の参議院選挙で、安倍さんは今年の年頭から「自分の任期中に改憲をやる」と言いだしているわけですよ。それは昨日あたりの発言でもそうなんです。安倍さんの発言は随分ぶれるんですよ、あの人の発言は。何からやるのか、どうするのか、本当にしょっちゅうぶれますからその時その時の発言だけを追いかけていくとこちらも引きずり回されるんですけど、しかしいずれにしても任期中に改憲をやるというのは昨日も言ってる。「任期中」というのは、2/3 をとろうとしたら、今度の参議院選挙しかないんですね、安倍さんの任期中には。もうそれ以外にないわけです。彼は 2018 年 9 月までの任期ですから。そういう意味で、安倍さん自身も背水の陣を敷いて、この参議院選挙に臨んでるわけです。ですからこの参議院選挙で、私は時々批判をされるんですけども、最低限安倍政権の与党に 2/3 をとらせない。なんで過半数取るって言わないんだ、と言われますけれども、それはそうでございますけれども、お互いがんばりたい、がんばりましょう、でも最低限のラインとして 2/3 は取らせないということに私たちの最低の目標を敷いて、それは何としても実現するというをやらなければならないんじゃないか。これだけ安倍さんが「参議院選挙後に改憲」ということを言って、そして「任期中に改憲をする」と公言をしてるわけですけども、もしできなかつたら、安倍内閣は退陣に追い込まれざるを得ない、退陣するかどうかはわかりませんが、あの人は図太いから、(笑) しかし、少なくとも、「あなたがそう言ってきたんだから、責任を取れ」という追及は国会内の野党のみなさんもやってくれるはずですよ。これは 2006 年から 2007 年にかけての第一次安倍内閣の時にそうだったわけです。彼は 2006 年に登場した第一次安倍内閣の時に「任期中に憲法 9 条を変える」と言った。しかし、2006 年 2007 年と状況が変わっていく中で、「9 条改憲」と言う声が圧倒的に弱くなっていく中で、これは無理だ、その間参議院選挙の問題があり、日米関係の問題があり、いくつか要素はありましたけれども、実際に任期中の改憲が不可能になったという中で安倍さんはお腹痛くなったわけですよ。ですからこれと同じ状況を私たちは今回、2/3 を安倍内閣に取らせないことによって、再現することは十分可能だと思うんです。ただ危ないですね、昨日あたりは、すごいヨタヨタしたことを言っていますね。へえっと思いました。私もツイッターで今朝から書きまくっているんですけど、「2/3 は与党だけでは取れないだろう。だから野党のみなさんの協力も得て、改憲の 2/3 を取って、なんとしても改憲をやりたいんだ」というようなことを言っています。これは必ずしも衛星政党というか、安倍政権にほとんど追随している大阪維新さんとかそういうところを言ってるだけではなくて、安倍さんの昨日からの発言の中には、あわよくば民進党さんとかこういうところも含めて、なんとか改憲の動きに巻き込みたい、そういう布石の発言だと思うんですよ。残念ながら、この間の民進党さんの姿勢をみていたら、そんな安倍さんの野望は夢でしかないのは明白で、民進党さんは、岡田さんは繰り返し、安倍さんの元で一切改憲の話にはのらない、というのを再三言ってますから、安倍さんがそういう邪道をやってもむずかしいんで

すけれど、しかしそう言わざるをえないほど任期中の改憲というのはむずかしくなっているのは事実なんです。これが北海道 5 区とか京都 3 区の闘いが安倍さんにそう言わせているんだと思います。運動の力が、各野党の力が安倍さんの改憲を非常に危ないところまで追い込んできているというのが、今の状況だと思うんですね。だからこれを何とかして、私たちはやりたい。この 2 年間、「安倍は辞めろ！」とみんな言ってきたんですね、SEALDs の若い子たちも「安倍は辞めろ！安倍は辞めろ！」と。「辞めろ！」と言ってもあの人は辞めない。(笑) どうやって辞めさせるのか、なかなか展望は出てこないんですよ。私たちに協力する野党は国会の中で少数だ。議決すればいつも負ける。「辞めろ！」と言っても、どうやって「辞めろ」というのを実現するか、叫んでいる私たち自身が、まよいまよい言っている面があるわけですよ。

それが、今度の参議院選挙で私たちの闘いによってはどうにかなる可能性も非常に出てきている、と私は思うのです。32 の選挙区は、野党が統一したからといって全部勝てるというようなそんな生易しいものではありません。選挙区によっては、残念ながら自民党・公明党の基盤は盤石な選挙区が 32 の選挙区の中にはいくつもあります。ここで勝つのは本当に大変だな、と思う選挙区はたくさんあります。ですから私たちは野党共闘を作り上げるのが、まず、初めの初めですから、問題はそこからだ。そこが北海道 5 区は 2 月だったわけですね。そこから 2 ヶ月、この 2 ヶ月必死で闘ってそうなったわけです。ですから私たちは今から後 2 ヶ月の間に、そういう北海道 5 区のみなさんが必死でやったようなあの闘いをやって、なんとしてもこの 32 の一人区で、かなりのところで、私たちが勝利するような状況を作らなければいけないと思うんですね。そのためには、今回の北海道の特徴であった市民の力だと思うのです。冒頭に、2015 年安保闘争の特徴を 4 つ言った中のひとつ重要な要素として、「市民の抬頭」というのを言いました。上野さんはこれを「政治文化の変化だ」というふうに言った。人によっては「新しい市民革命が始まった」とまで言う人もいます。「あ、そうかな」、と思いながら、私も「そんな気かな」とあんまり自信もって言われると、だんだんそういう気にもなってくると思ってくるんですけど、そういう状態のなかですから、この市民が野党の人たちと一緒にどうという選挙戦を作っていくか、だと思うのです。ここがすごく大事だと思うのです。向こうはともかく「自公対民共」ということを描くことによって「ここは民進党と共産党が手を結んでいるにすぎないんだ」と、「こういう野合に対して自公は闘うんだ」という構図を作ろうとしているわけですから、私たちはそうではなくて、「野党の結束とそれに市民という大きな新しい勢力のかたまりが、一緒に闘うんだ」、それが、たとえば市民連合だと思うんです、手前みそですけども。これは戦後の日本の政治運動の中でこういう経験を私たちはしていないんですね。辛うじてあるのは 89 年の、ユニオン連合がやった参議院連合というのをやったというのが一度です。政党さん以外が、参議院選挙に立ち向かったという経験は。そしてあれはユニオン連合さんがやったことですから、かなり組織された人たちが闘った。そういう意味では今回の市民連合というのはそうではなくて本当に草の根の、一人ひとりの市民の、あるいは小さな一つ一つの市民のグループの集まりが、今回の新しい形の選挙戦を作っていく材料になろうとしてるんです。私はこのことがすごく大事なんだと思うんですね。ただ、北海道の経験でも、何度も私は仲間たちに聞きましたけれども、本当に途中で、野党のみなさんとの協議で卓袱台返しやろうか、と何回も思ったということですね。「夕べも、もうほんと卓袱台をひっくり返そうかと思った」と電話してくる時が何回もありました。政党のみなさん、私たちの仕事について本当にわかってもらえない、都合がいいときに使う、というだけで。あるいは私たちの運動を、別の方は「あ

「うちの党」系の運動ではないか、というふうに言う。そしたら、こっちの党は、あっちの党に肩入れ、支持してるんじゃないか、と言う。どうしても政党さんは、市民運動がやっていると、これはどっちか系等じゃないかな、と疑いあんまり信用してくれない。ほんとに腹が立つ、というのを繰り返してやってきた中で、でも素晴らしい候補者を得て、ああいう闘いをやってきてくれたと思うんですね。ですから今、全国でこういう「めぐろ・せたがや」のような運動が作られつつありまして、先日も全国交流会をやりましたけども、今年もこれからもう一回今回案内をすることになりますけれども、6月5日に国会包囲の大行動をやるんですけど、その前日にもう一度全国からお出でのみなさんに集まっていただいて、「市民の経験交流会」というのを全国のみなさんと一緒にやって、この参議院選挙にどう立ち向かっていくかと、運動や経験を交流しながら、がんばっていきたいと思ってます。6月5日は、昨年8月30日に匹敵するあるいはそれ以上の大きな行動をやりたいと思ってます。私たちの運動はあくまでやっぱり車の両輪だと思うんです。選挙運動に関心ある人たちは選挙運動はそれは独自の課題なんですけども、それだけやっては市民運動の特徴は出ないと思うんです。やっぱり市民運動の特徴は、大きな市民の大衆行動を作っていくことと、選挙運動と、この両輪で進めていく、ということなしに私たちの大きな前進や結束は作れない。6月5日も国会包囲の大行動をやるので、どうかみなさんと一緒に結束して闘えたらな、と思います。ありがとうございます。

2) 質疑応答

質問者 A (男)

ひとつ、多分みなさんもそうっておられると思いますが、ここに来ておられる方々、あるいは国会前に集まった方々はもうすでに選挙にも関心があって、政治にも関心があって動いていると思いますけれども、一般の普通の市民の方、われわれ国会前から地下鉄に乗って帰ると、地下鉄の中ではそんなことを考えていない人が 99.9% ですので、そういった方々にどうやって働きかけていけばいいのか？ 例えば、60年安保、70年安保、あるいはもっと最近の89年の土井たか子さんの時の選挙で勝った時、あるいは細川政権ができた時、民主党が政権交代した2009年の時は、はっきり言うと、マスコミがわれわれ側に好意的な報道をしていました。ところが、マスコミは今はああいった惨憺たる状況です。おそらく「4月になってからニュースを見たことがない」という方もたくさんいると思います。であれば、われわれは、ここにいらっしゃるみなさんはいろいろやっておられると思いますが、普通の市民、選挙民にどうやって働きかければいいのか、このあたりお考えをいただければ、と思います。



高田さん

それは、本当にむずかしい問題ですよ。おっしゃる通り状況はそうだと思うんです。マスメディアはほとんどこういう動きについて報道しません。ただ、それでも報道させる努力とか、あるいは広範な一般の人たちにどういうふうに働きかけるかと、そういうことについてはこの2年間だけでも様々に経験を積んできていると思うんですね。それらをみんな寄せ集めるしか方法は、今のところありません。これでやれば、というのは私もまっ



たく浮かんでできませんで、いろんなことをいろんなふうに積み重ねるしか方法はないかな。ただ、今回の場合に本当によかったと思えるのは、それだけ厳しい闘いの中で北海道の人たちはいわゆる無党派層といわれる支持なし層ですね、その7割以上の人たちから支持を獲得してきた。この北海道の人たちの闘いは、私は非常に素晴らしかったと思うんですね。確かに、様々な行動に対して多くの市民が直接参加してくるわけではありませんけれども、いろんな世論調査でも、いまだにこの戦争法が通ってもう8ヶ月近くなろうとしているのに、それに反対だという声が世論調査でもすごく多いわけです、あいかかわらず、こんなことは本当に珍しい状態です。ここにどうやって私たちが手が届くようなことをやるか、今日の会合もふくめて、一緒に知恵をしぼることがすごく大事なんだと思います。申し訳ありません、回答になりませんで、一緒に考えたいと思います。

質問者 B (男)

手塚といいます。北海道5区の補欠選挙の総括、検証は、高田さんがいま話されたことで尽きるんだろうと私は思いますけれども、今回、かなり世論調査が、各党、各社、頻繁に行われておりまして、私ども党人のもとにも日々更新された情報がどんどん入ってきました。その中で一番私が気になったのは、野党統一候補がどんどんどんどん追い上げていって、公示直後に一旦は逆転をして、でそれでまた逆転をされてしまった。そういう傾向が全体としてあったと思いますが、同時に支持層を分析をしていきますと、池田候補は無党派層の6割から7割支持を獲得していたけれども、一番池田さんが候補者として弱かった層が、20代30代の若年層、若い層、投票率もあまり高くない層が弱かった、各社傾向としてすべて出たんですね。そういう分析を聞く中でわれわれは、投票率が上がったのが有利なのか、上がらない方が有利なのか、ということまで思いを巡らしていたんですけど、高田さんにお伺いしたいのは、この20代30代が自民党、与党候補が強かった強くでたというのは、全国的な傾向と見るべきなのか、あるいは北海道のあの地域の独自の傾向と見るべきか、いずれにしてもどうしてこの20代30代に、SEALDsのみなさん中心にあれだけ大きなムーブメントがあったにもかかわらず、若い層から市民連合の候補者が、強く受け入れられなかった、その分析がもしあれば教えていただきたいと思います。

高田さん

これも本当にむずかしいんですね。おっしゃる通りなんです。各党が繰り返し世論調査を業者にやらせて、データが入ってくるんです。途中で、池田さんが上回ったという情報が各社の報告で出た、これが私は、参った、と思うんですね、結果として。それからの自民党、とりわけ公明党・創価学会の動きというのはものすごかったですね。全国から集中したんですね、北海道5区に、創価学会が。負けたら大変だ、負けてるということで。ですから、この発表があった時に、陰謀じゃないかなんて陰謀論を言う人もいたんですけど、まあそうとも思いませんが、でも明らかに世論調査でそういう変化があって、政権党が権力を持つてる勢力が、総力をあげて後半戦、この北海道5区に押ししかかっていたのは、もうまちがいないですね。おっしゃる通り、様々なデータで20代30代の層からの池田さんに対する支持が低いんです。これ、北海道の人たちも今いろいろ議論しているところです。いろんな意見があります。特に、和田さんてのは、ほとんど、体格が良くて体は良くて頭は空っぽなんて言われた人なんですけど、(笑) かつこいいんだそうですよ、結構。そういうのが結構あったんじゃないか、それを人気としているのは、わりと池田さんの人気とやっぱり別の意味であったというの、なかなかやっぱそれに合わせて創価学会なんか動いたら、その流れの中

で、あんまり馬鹿にできたものでもないな、てのもありますし、それから繰り返し言いますが自衛隊なんですよね。自衛隊はみんな若いんですよ。この層が、あそこの選挙区ではとりわけ多い。そういう中での世論調査で、この影響も必ずあったと思うんです。それから SEALDs の話が出たんですけども、個別団体を言うつもりはありません。わたしの仲間も若い方が駆けつけたりいろんなことをやっていますから。しかし、これがどこまで北海道 5 区で効力を効果を発揮したかというのは、やっぱり東京からの応援団はもう少し考える必要があるかなと今思っています。もしかしたら東京流の選挙運動をやった可能性がある。本当に地べたを這うような厳しい選挙戦を私たちの若い仲間たちがやりぬけたか、あるいはその経験を持っていないわけですからやむを得ないのですけれど、そういうのをたった 2 ヶ月でどうやって伝えていくのかなを含めて、そう簡単に言えない問題がたくさんあるんですけど。若い人たちに必ずしも浸透しなかった理由には、もしかしたら現れるかもしれない。これはわかりません。検討した方がいい問題かなというふうに思っています。

質問者 C (女)

18 歳に選挙権が引き下げられたということで、ところが「選挙しろ、選挙しろ」というような教育はなされているのかもしれないんですけども、根本的に「なぜ選挙が必要なのか?」「基本的な国民の権利である」ということ、それから日本国憲法をちっとも教えなくなっているのが昨今だと思います。そして、たとえば、高田さん一緒にやっておられる総がかりの菱山南帆子さんが、川崎で講演会を 7 月の選挙の前に、市民の側がやってほしいということで出したところ、市側から拒絶されて、まずいと、いうふうに言われて消されたということがあります。これはとても大きな問題だと思っています。選挙の前だから政治のことはみんなが関心を持たなければいけないのに、「政治家的だ」ということで止めろと言う、これは世田谷にも同じようなケースありまして、「こういう人を選挙前に呼ぶのはいかなものか」ということはしょっちゅうあります。それから、平和とか憲法とを題材としたいろんな催しが、会場を断られるということが起こっています。こういうことは少し、運動を進めるうえで「これは変だよ」という声として、「選挙前だから、政治のことはみな関心を持とうよね」ということでやっぱり作っていかなくちゃいけないんだろな、と思っているんですけど、その辺いかがでしょうか?

高田さん

まったくその通りです。いま菱山さんのことをお話していただき本当にありがとうございます。川崎でそんなことがありまして、いまこれにどうするかということを考えている最中です。要するに 18 歳選挙権について、若者に選挙に行こうというテーマで、菱山南帆子さんに話をしてもらおうというのが、川崎の市民団体が公民館の企画として考えたんですね。そしたら、公民館の方が、「この菱山南帆子は国会前でコーラーをやっている人物だ、適当ではない。」と、そういう理由でこの会合自身をつぶしてきたんですよ。今、主催者の人たちと相談をしながら、これをこのまま許すわけにいかない、人の、その思想信条によってどういう人が来るかとか、その思想調査までやってね、そのうえで講師が良くないのなんのということ、公民館が言うことか、市が言うことかということで、これは闘わなくちゃいけないと思ってるんですけども、この手の動きはもうほんとに多くなってきていますよね。全体に安倍政権の意向を見ている、というこういう動きがすごいある中で、ほんとにこれはなんとかしなくちゃいけないんですけども、ぜひ私たちとしては運動でやる以外に

ないので、できるだけこのことを広めていきたいと思ってるんです。いま、主催者のひとたちがこれにどう、市と闘うかというのは検討されている最中なんですけれども、菱山さんと私たちはこの事実に関しては、私たちがどんどん広める、そのことで構いません、というふうに主催者からも言われてるので、こういう妨害があったというのは、広めていきたいと思っているんですね。それからこういう一つひとつ、このわれわれに対して、反撃をしていく以外に、方法はないかな、というふうに思っています。

質問者 D (女)

私たちは小さな会で、18歳選挙権で会をやったのですが、世田谷の選挙管理委員をしている人の話で、その人たちは出前授業といって、あちこちの学校に高校生を集めて18歳の高校生を集めて、選挙どうしたらいいか、一方的な意見じゃないけど、そういうふうなことをやってきた中で、高校生が、どこへ行っても一番関心を持っている第一位は、バイトの時間給、という話が一番多かったと。それはある意味でちょっとびっくりしたというか、考えさせられたという話を聞きまして、それと、わたしはその点と、例えば、いろんな新聞社で世論調査やりますよね、安保法制自体に対しては非常に反対のパーセンテージは高いですよ、確かに、5割以上取るんですけども、じゃあ、選挙で何が一番問題にしたいか、ということの世論調査というのは、安保法制ではありません。もう、かならず雇用とか景気拡大とかっていうのはいつだって一番大きな関心ですよ。そこをね、ものすごく私、ここに来た人でなくて、一般の人たちの中で本当は安倍の政策に最も恵まれない層というのがやっぱり安倍政権に入れてしまう、というかね、やっぱりそれだけ生活が苦しいとか、命の問題にもかかってくると思うけど、そういう層というのを、全然取り込んでこないで、そのことを自身を問題としないと、やっぱり私たちはなんでも安保法制反対で、それだけ思っていればいいんじゃないか、というふうな狭い考えというか、見すぎてきたということ、その高校生がどこへ行っても時間給の問題が一番関心が高い、ということで、これをこう真摯に受け止めていかないと、やっぱり選挙に行ったときに、取りこめきれないんじゃないかと思っています。

鈴木さん

時間がないので、受け止める、ということで。

質問者 E (女)

不登校対策法案が、この連休明けに国会に上程されようとしています。アベノミクスの中で、新・3本の矢の中の一本が、不登校の子供と発達障害の子供を、学校外のフリースクールとかそういうところで対策するということがあって、新たな法案というのは不登校の子供を不登校支援学校に出すというようなことが言われていて、新アベノミクスの中で…。それで反対運動をしているのですが、ほんとに子供の問題はさらに、どこにも届いていかない、という問題があるものですから、選挙権は18歳からということですけど、子供たちが選挙の状況になった時に、どんどん網の目から落とされていく、というようなことがありますので、子供の問題というのをどんなふうに、政治的な課題として扱っていただけたらいいのか、教えていただきたい、と思います。



高田さん

先ほどの前の方が言われたこともそうですけれども、市民連合の問題意識は、やっぱり戦争法制の問題、立憲主義の問題だけではなくて、先ほど言いましたように、選挙ですから、個人の尊厳を擁護する政治の実現ということで例えば格差・貧困の問題とかそういうのも含めて、広範に積極的に取り上げて野党のみなさんと協力していく必要があるというふうに私自身も、そこは思っています。今そこが変わってきてることにぜひ着目していただきたい、と思うんですね。この前の「保育園落ちたの、私だ!」というあの運動の中ですよ。私は、あれはものすごい特徴だと思うんです。あの、わたしが、ひとりで行動を始めることが、運動になっていく。昔のように古い運動をやった奴はやっぱり100人集まんないと、1000人集まんないと、なんとなく恰好がつかない、というようなそういう躊躇がついて、そうではなくて、「今の政権はおかしい」と思ったことに対して一人でも行動を起こす、そういうことが多くの人々の共感を呼んで、運動になっていく。だから、政治の文化が変わったといわれる大きな要素がそれだと思うんですね。だから、市民の人が一つひとつ問題意識を持ったことをどうやって行動で表現するか、ここで私たちは苦勞する必要があるかなというふうに、あるいはそこに展望があるかなというふうに思っています。(拍手)

鈴木さん

どうやって区民に広く知らせていくか。ここにいない人にどうやって知らせていくかは、明日からの課題。2ヶ月経つと投票日なので、選挙公示までの運動期間は1ヶ月半しかない。「今日ここで一本化にむけて運動が始まった」というカラーのチラシを作るので、運動を広げていくための協力、カンパもお願いしたい。区民や全国、政治家にこの運動を知らせていきたい。

第2部

1) 政党関係者から

手塚よしおさん(民進党 元衆議院議員)



東京5区で衆議員選挙立候補を予定しております手塚よしおでございます。49歳、1996年から導入された今の小選挙区制で民主党から立候補させていただきました。勝ったり負けたりしておりますけれども、今49歳、引き続き政治活動を続けていきたい、と思っております。今回、この市民連合めぐろ・せたがやの方々と何度か議論をさせていただきました。個人的な考えという意味では、私は憲法9条を守る立場でありますし、昨年安保法制に対して、ことばで言い尽くせないほどの強い憤りを感じてまいりました。そういう意味で、市民連合が統一候補を作っていくということ、特に政党間の協議に先立って、地域の方々、市民のみなさま方が連帯をし、引っ張っていくことに敬意を表しますし、これからも詰めていかなきゃいけない点がたくさんあると思いますけれども、簡単に言えば、2年前の閣議決定、集団的自衛権の行使容認の閣議決定までさかのぼって検証していかなきゃいけない、と思いますけれども、簡単に言えばですね、昨年14年の年末に行われた衆議院選挙は、日本全国でならせれば、国民の約2割の方々が、

自民党もしくは自民党の地域の候補者に投票した、2割です。たかだか2割です、5人に1人。これは投票率という問題もあり、投票率は50数パーセントでしたから、投票した人のなかでは5人のうち2人くらいですが、国民全体という意味では2割、5人に1人です。しかし、選挙制度のあやもありますけれども、その中で衆議員では7割の議席を自民党は占有した形となる。2割の民意で7割の議席を占有している、その状況の中で、国民の意に沿ったことをしてくれればいいんですけども、6割以上の方々が明確に反対の意思表示をしていた安保法制の強行、これはその選挙で選ばれた代表が、立法府において、閣議決定という行政府に対して、立法したという形であります。本末転倒だと思いますし、このアベコベな政治状況に対して、多くの方々が今声をあげ、行動されようとしている。一兵卒でありますけれども、先頭に立つつもりで、私も精進していきたいと思えます。

今日はたくさんみなさま方のご意見を承ればと思います。よろしく願いいたします。(拍手)

宮本 栄さん (日本共産党 目黒区地区委員会委員長)

東京5区の候補者は、まだ共産党は発表できていなくて、今準備中で、擁立の準備は進めています。もちろん、野党を一本化して自公に勝つと、この目標をほんとにやり遂げたいというふうに思っていますが、政党としての準備、総選挙準備はこのまま遅らせるわけにはいかないということで準備は進めていきます。私自身は54歳になりまして、東京5区では2000年から3回立候補して、手塚さんともいろいろ闘ったという経験があります。そのほかの時も裏方として支える側でがんばってまいりました。私自身は政治とのかかわりというのは、法政大学在学中に共産党に入党しまして、その後普通の会社に就職をしまして、その頃ですね、ちょうど私社会人一年生の時に、労働者派遣法というのが国会に出されたんですね。それから何年かして消費税3%導入されると、それから20代の頃にPKO法ですね、自衛隊を初めて海外に派兵するという、こういう今につながる悪政の種がまかれたというのが、私が20代の頃で、その間会社で仕事は真面目にやっていたんですけど、政治のこともやっぱり黙っているわけにはいかないなと思ってる。一所懸命やってまして、やりすぎてちょっと会社で浮いちゃった、みたいなことがありまして、30代中頃から専従として働いていると、そういう人間です。

今、ほんとにさっき言った悪法、20代の時に種がまかれたわけですが、安倍政権のもとで今その完成が狙われていると言いますか、選挙が終わったら憲法改正だと、労働者派遣法もほんとにひどいことにされてるし、消費税も上げるということで、否定していないですよ、熊本で震災が起こったといっても。だから本当に、もう、ギリギリの、悪政これ以上許さない押し返す闘いだというふうに思っています。今は、安倍政権がそうやって悪政を急いでいるし、国民弾圧とセットでこれ進めようとしていると、これ本当に自民党自身も追い詰められている、焦りの表れじゃないかなと思っています。実際、今の議席、たくさん持っていますけれど、総選挙で自民党が比例で獲得したのはたったの17%に過ぎない。4月の11日には目黒の区長選挙ありましたけれども、現職が33,000、われわれが22,000票で、今日、候補者として闘われた小泉さんもいらっしゃいますけれど、4:6で負けはしましたけれども、新人が現職に対してこれだけ迫ったというのは、画期的な成果だったなということと、思っているんです。実際に開票所の声なんか後から聞きましたけど、自民党はね、トリプルスコアだなんてことを開く前は言っていたそうです。ところが開いてみたら二万票を超えると。無所属で闘ったですから、「共産党つええなあ」ということをね、自民党の立会人が



言っていた、ということを知りました。で、今本当にわれわれは追い詰めているし、今度の参議院選挙で 32 の一人区で、もう大半で 20 まで決まったというふうに聞いていますけど、ここで野党の統一というのがなっていけば、ほんとに安倍政権ひっくり返すと、こういうところまで来ているんだと思います。東京 5 区では共闘をめざしてがんばりたいと思いますが、本当に重要な選挙区だと思うんですね。私、若宮健嗣さんのホームページをザッと印刷してみたんですけど、彼は今防衛副大臣なんです。中身を見ますと、自衛隊の基地視察しました、戦車乗ったり、戦闘機乗ったり、軍服を着た写真もたくさん載っています。それから節目節目で米軍の高官なんかと会談をしたり、それからアメリカとかヨーロッパの兵器産業の CEO が来日しましたとか、会ったりしている。これ見ると、本当に安法制とか武器輸出とか、そういうものを安倍政権を陰で支えてきた中心人物と、そういうあまり知られていないですけど、そういう人を相手に闘うのです。だから、5 区の勝利というのは本当に私は大事だなと思っています。国会答弁の機会なんかも、彼最近増えているようで、見ますと、米軍住宅、相当な幹部用の住宅、高級で一億円くらいする住宅を作っているわけですが、トイレが 3 つ、浴室 2 つある、これどうなんだ、と訊いたら「向こうの人は、一人に一つのお風呂・トイレが一般的です」(笑) と、こんな答弁をして、防衛費は初めて 5 兆円を超えるということになるわけですけど、なったわけですけど「思いやり予算」を増やしている。アメリカから兵器を買ったと、この予算を急激に増やしているんですよ、今。だからほんとに、軍事一色の国家を作ると、そうなるやっばりしわ寄せが来るのは社会保障と国民の暮らしのところだと、本当に明らかだというふうに思うんですね。だから、ほんとに平和を守る、立憲主義回復すると、だからほんとに国民の暮らしを豊かにする政治実現する、そのためにも今度安倍政権打倒と道を開く闘いを進めたいと、よろしくお願いします。(拍手)

落合貴之さん (民進党 衆議院議員)



東京 6 区で活動させていただいております新人の衆議院議員の落合貴之でございます。世田谷の自営業者の家に生まれました。小さいときから政治には興味を持っていたんですが、親族等に政治家はいません。銀行員、サラリーマンを経験してから政治の世界にきました。生まれも育ちも政治とは関係なかった世界から政治の世界に入りましたので、ぜひ、ある意味での素人感覚を大切に、生活者としての感覚を大切に活動をしていきたいと思っています。もともとは、小さい党のみんなの党というところから、2 回前の選挙で立候補しました。その後、みんなの党が安倍さんの秘密保護法に賛成するという

ことで、私はそれは間違っているということで、浪人中に離党しまして、そこから 1 年近く無所属で活動してました。その時にですね、秘密保護法には反対だけでも論理的な賛成の人とのやりとりが、うまく論破できないと、立ち往生しているときに、いま市民連合にも関わられている武井由紀子さんという弁護士が、私のことを見つけていろいろとアドバイスをしてくれまして、それ以来武井さんには本当に、いろいろな節目節目で理論的なアドバイスをしてもらっています。先ほども、経済の話というのがありますが、だいたい無党派層の中でも、安保反対の人、原発反対の人は、だいたいどうやって安倍さんに、何が理由で安保反対で、何が理由で原発反対というのは、だいたい意見が一致し始めていると思います。でも、問題は経済で、「安保、原発も重要だけれども、アベノミクスやってもらわなきゃいけないんだ」という無党派層が残念ながら多い、というのが選挙で勝つためには重要なポイントになると私は思います。で、いま安倍さんは胸はって、アベノミク

ス成功している、と言っているんですが、いま企業の内部留保、日本で最高水準ですが、実質賃金は断続的に下がっている、と。それで経済がいいと言えるんですか？と。そして、私いま 36 歳ですが 20 代、30 代 4 割が非正規雇用で、それで、経済成功しているんですか？6 人に 1 人の子供が貧困である。それで、胸を張って言えるんですか？という状況だと思います。逆に、経済でも、安倍さんダメなんだ！ということで一致すれば、私は無党派層も、20 代、30 代も、一緒になって政治を作っていこうという流れができると思います。私はいまの経済というのは、拝金主義に傾きすぎていて、安倍さんというのは株価を上げることに注力してますから、拝金主義に、より安倍路線というのは傾きすぎていると思います。それに代わる考え方というのは、私は、「公益資本主義」と言っているんですが、おおよしの利益の資本主義ですね、まあ共産主義とは違う、と言われるかもしれませんが、金融にかたよらずに、face to face で、隣の人のために働くことで対価を得ていく、そういう経済を作っていくことが私は必要だと思います。その中で政府の役割というのは、機会を均等にする、だれもがチャンスがあるようにする、ですから最低限の分配は必要ですけども、特に教育というものは、なるべく無償化に近づけていく必要があると思います。この幟を見てみると、「あなたの投票で政治は変わる」、よく考えてみると、当たり前なことなんですね。民主主義国家ですから、われわれ国民の多数決で国の方向が決められているにも関わらず、安倍路線が過半数を取っている、この状況をやはりわれわれは受け止めていかなければならない、と思います。やはり、選挙に行かない人たちにも立ち上がってもらえるような状況を作らなければなりません。私は、今まで、今民進党ですけども、「みんなの党」ですとか「維新の党」ですとか、ほとんどが支持率がゼロ%の党で政治活動をしてきたので、無党派層と 20 代、30 代に応援してもらわなければ票が取れない、というところでずうっと活動してきました。ですから私は、そういった層に引き続き訴えていくこと、それからこの日本中の状況をひっくり返していくためには、自民党を支持していても安倍さんを支持していない人たちはたくさんいます、そういう人たちにも、一人ひとりに訴えていって、東京 6 区から政治を変えていく、流れを変えていく、このためにがんばっていきたいと思います。ぜひ、わたしは経験が少ないもので、厳しいご指導、ご意見をいただければ、と思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。(拍手)

岸たけしさん（日本共産党 衆議院東京 6 区予定候補）

日本共産党衆議院東京 6 区予定候補の岸たけしでございます。本日はこうした会にお招きくださいませ、またこうした会を開いていただいて、本当にありがたいと思います。ありがとうございます。

私自身は世田谷の区議会議員を 3 期 12 年やらせていただきました。そして、2014 年の 12 月の総選挙に立候補させていただきました。その時は、ご支援くださいましたみなさま、ありがとうございます。51,595 人の方からのご支援をいただきましたが、お隣にいらっしゃいます落合さんの投票と合わせますと、当選した自民党の越智議員を上回る得票だったということも報告させていただきたいと思います。わたしはここで、本日 3 つのことを申し上げたいと思います。一つは、何よりも、今の安倍政権を倒すために野党が一本化して、そして市民と力をあわせて、こういう点ではみなさんと気持ちは一つだということです。今までに市民連合のみなさんと二回ほど会合を、お話をさせていただきました。安保法制を廃棄して、そして何としても立憲主義を取り戻す、こういう問題を含めて、ほんとにその意見はあらゆるところで一致をするという結果になりました。ぜひ力をあわせて、がんばり



たいわけですが、2015年9月19日、ほんとに安保法制の強行採決がされたときは、ほんとに悔しい思いでした。私も、区内各地で、これを通させない宣伝行動と署名行動と、いろいろやっていた真っ最中でありましたので、本当に許せない思いでいっぱいです。これを本当に変えたいと思うわけですが、日本共産党、その日のうちに新しい方針を出しました。本日お手元の資料にあったかもわかりませんが、そちらの橙のオレンジ色の中に書いてありますが、その日のうちに戦争法廃止、安倍政権打倒の闘いをさらに発展させること、そして戦争法廃止に一致する政党・団体・個人が共同して新しい政府を作る、そういう提案。そして三つ目に、戦争法廃止の国民連合政府に一致する野党が、国政選挙で選挙協力を行う、こうした三つの提案をさせていただきました。これらは共産党の提案ではありますが、しかし、出所はやっぱり市民のみなさんの運動でした。野党は共闘せよ、と、こういう声が高まる中で、やっぱりそれに応えてこういう方針を出そうということで決めた方針です。それがその後もいきまして、今年になってからの2月19日、5野党の党首会談で5野党の一致がみられました。そして、そこで4つのことが決まりました。4つのことというのは、安保法制の廃止と集団的自衛権容認の閣議決定を撤回する、これを共通の目標とすること。それから、安倍政権の打倒をみんなで求めて目指していく、ということ。国政選挙で与党の自公と補完勢力を少数に追い込むこと、そしてそのためにあらゆる努力を行うこと、この4つが合意されました。そうしたことを基に、いま参議院選挙が闘われています。全国、32の選挙区のうち約20の選挙区で統一候補が決まっている。そして野党統一候補としていま選挙が闘われている、こういう状況を作り出してきているわけです。先日の北海道5区でも、こうやって野党が共同して市民と一緒に闘えば自公を打ち負かすことができると、こういう可能性があるんだということが証明されたと思います。

今、こうしたところで次に二つ目に申し上げたいことがあります。こういう流れを、参議院選挙に止めないで、衆議院選挙で実らせていきたい、ということです。衆議院選挙でも、ぜひやっぱりこうした野党共闘を実らせて、この東京5区と6区においても、こうした動き、ほんとに5区・6区において実らせようではありませんか。このこともお話したいと思いました。

三番目にお話ししたいことは、より豊かな政策を作って、それで選挙も闘おうということです。今度の参議院にしても衆議院にしても、選挙は立憲主義を取り戻して、そして安保法案廃案に追い込んでいく、そういう大事な選挙です。同時にそれを土台にして、その上に消費税の問題、それから原発の問題、TPPの問題、そしてアベノミクス、この格差を広げるだけの経済政策から、格差と貧困をなくすこと、こういうことを例えば出して、いろいろな豊かな政策を掲げながら、それで選挙をみんなで闘っていく、そういう大事な選挙になると思います。ぜひこうした点でも、みなさま方のご意見をいただければ、と思います。最後になりますが、様々な困難はあると思いますが、しかし、市民と国民と野党が力をあわせれば、乗り越えられないことはないと思います。私も、そうした、みなさんと大同団結する立場に立って、力をあわせて未来をひらく、そういう闘いと選挙を行っていききたい、そのことを申し上げて、この場での挨拶とさせていただきます、と思います。

(拍手)

羽田圭二さん (社会民主党 東京都連代表)

社民党東京都連合で代表をしております羽田圭二です。同時に世田谷区では、区議会議員、世田谷の社民との総支部の代表も務めています。

安心してください、私は候補者ではありません。(笑) そのうえで、東京の代表



ということもありますし、全国の様々な役員も含めて、行っているということもありまして、この間社民党がはたしてきた役割ということもですね、あわせてみなさんには報告はさせていただきたいと思います。しかし、大前提は、あの国会前に結集をした多くの市民そして労働者、多くの方々が連日、昨年集まったわけです。私、先ほどの高田先生の話じゃありませんけど、あの国会前の集会、今日お集りのみなさんほとんどはそこへ行った方々と思いますが、あの集会を通じてつかんだ情勢、声、そのことから今日のこの集会も、それから今後の闘いもあるのではないかと、思っています。今日の中でも、先ほどご意見なり、あるいは質問なりが出されておりましたけど、あの集会で私を感じたのは、ひとつはもちろん立憲主義そして民主主義を守る、そのために何が必要なのかということも多くの方が言ったこと、これは各政党も応えましたけど、ほんとに今の国会に熟議、つまり民主主義の根幹である熟議ということがまったくない、このことが多くの方から言われました。そして、立憲主義を守る、このこともはっきりと言われました。これに応えなくてはならないということが当然のことながら第一です。そして、戦争法廃止に向けた取り組みを強化をしようということを決意しあったのではないかと思います。しかしそれだけではありません。とりわけ、学生やそして、さらには非正規労働者のみなさん、仕事が終わってからあそこに集まった方々から言われたことは、自分たちの生活と命、ここを守りたい、ということも同時に言われたかと思えます。学生のみなさんは、奨学金制度の問題に触れ、これからの、これはもうすでに自民党まで、安倍内閣まで言ってますが、この奨学金制度の抜本的な改革については、給付型の奨学金制度の創設ということも言われておりました。これは、実は学生のみなさんから指摘されてきた政策のひとつでもあったわけです。そして非正規雇用労働者のみなさんは、ブラックバイト、ブラック企業、ここで働かされている実態、残業をしてもお金が出ない、あるいは低賃金のままでなかなか改善ができない、このことを含めて、今のこの政治に求めているということを使ったのではないのでしょうか。したがってこのことに、先ほどの候補者の決意からもありましたけれど、こうしたことにしっかり応えていくということが、私は必要だと思っています。野党共闘ということも、しきりに言われました。「野党は共闘！」だという、あの甲高い声をですね、みなさん受け止めながら、あそこで大声を出したのを、現在でも続いておりますけど、このことも大きな意味を持っている、と私は思ってます。すでに32区の一人区、ここで20区は決まった、と言われておりました、あと9区もすでに、今日の日本経済新聞によりますと、すでにほとんど決まっているという話があります。私の関係するところで言いますと、とりわけ香川とか富山は大変社民党の強いところだと言われておりますが、そこでも民進党のみなさんとの選挙協力、ここが決まっていくということが言われておりますし、その意味ではそれぞれの県の状況もありますから、これは例えば労働組合が非常に強いところ、そして労働組合だけがただ一人で突っ張っていくというのではなくて、市民のみなさんとも相談をしながら、そこで市民派候補者が決まっていくという、そういう例も各県で起きているわけでありまして。ですから、そうした力を結集をしながら、「野党は共闘！」という、そのことに応えていくということが今後必要だと思っています。さきほど高田先生にもおうかがいしましたが、参議院が3区ですね、残りの3区、岩手、それから鹿児島、あともう一つ佐賀でしたか、その3県がこれからさらに調整をするということになっておりますが、そうしたことを含めてしっかり、みなさんと社民党と今日お集りの民進党、共産党、そして今日お見えになっておりませんが、生活の党、一緒になって協議をかさねていきたい、そのことをみなさんにお伝えして、私からの挨拶とさせていただきます。(拍手)

鈴木さんから来場している都議、区議（下記）の紹介がされた。

民進党前都議・伊藤ゆうさん、日本共産党目黒区議・岩崎ふみひろさん、生活者ネット目黒区議・広吉敦子さん、日本共産党目黒区議・松嶋祐一郎さん、日本共産党都議・里吉ゆみさん、社会民主党世田谷前区議・桜井純子さん、関口太一民進党前都議からはメッセージ受領。

*集会では紹介はされなかったが、民進党世田谷区議・藤井まなさんが出席、民進党前都議・山口拓さんからはメッセージ受領

2) フロア発言

発言者 F (弁護士) (男)

私は政治家じゃありませんけれども、今日の高田さんのお話の「市民連合」、本当にこの動きが、かなりぼくら弁護士の仲間では、地殻変動を起こしている、と、その中で、ぼくらも今日、政治家のみなさんが話されている部分を、弁護士たちも、弁護士たちといっても市民のみなさんから動かされて、それでがんばろう、ということで、みなさんご存知のように、あの「安保法制違憲訴訟」が、ようやく、しかも、私そこらじゅうで言っているんですけど、今日臨時に私の名前の文章の中にホームページが載っていますが、大変、自分で自分たちに言うのもあれですけども、すごい、素晴らしい訴状ができた。本当にシベリアで苦しんでいた、戦後もずうっと平和を求めて、9条も含めて、東京大空襲のみなさんもそうです、あのママの会、あらゆる関係者の人たちが、このずうっと平和を守ってきた人格が、ズタズタにされた、とこれこそ、その損害賠償だけじゃなくて、先ほども話が出ましたように、この安保法制は大変危険な、殺し殺されることが現実的にやはり起こりうる、とこれを一つの大きな原因として差し止め、安保法制に基づいて自衛隊が海外へ行くということを差し止める、そしてお一人お一人の損害賠償を、ほんとに賠償してもらおう、それだけじゃなくて、先ほど出ました、立憲主義、私たちは、憲法 13 条、個人の尊厳、幸福追求の権利を、若者も含めて、私たちもうあと何年かない年寄りも含めて、ズタズタにこの 13 条をほんとに侵害されている、この 13 条を守るのが国家の目的だ、これが国家の目的で国家がこの個人の尊厳を誠実に実現しなければならない、それに制限されてる立憲主義を大きな柱としてがんばってます。先日 の差し止め、そして 450 名の国家賠償、そしてほんとに私たちの、地殻変動のところに参加させてもらって、私たち弁護士たちはいきいきと、よしっ、じゃあ全国それぞれ一つひとつ、一つの県に、弁護士会にほんとに広げていこう、というところではがんばってますので、(笑) みなさんががんばりましょう。

(拍手)



発言者 G (民間保育園の園長) (男)

こういう会があるというんで来てみました。私は世田谷で民間保育園の園長をしております。ご存知のように、待機児童の問題は大変な問題です。先ほども、子供のこと、というふうなことで話があったと思うんですけども、やっぱりこの 70 年間戦争のない社会を守ってきた中で、このかわい子子供たちを戦争に巻き込むということは絶対に許せないことですし、いま 13 条のこと言われたけど、本当に一人ひとりが大事だということを身をもって、いま感じています。この子供たちのために、お父さんやお母さん、職員一同、職員のことでもちょっと思い出したんですけど、思い出した

って、毎日のことなんですけど、世間の給料と十萬円の差があるというふうに新聞報道もされましたけれども、ほんとに働き続けていけないような保育所でもいいんだらうか、ってなのを考えています。ぜひ今度の選挙で、平和の問題と子供の問題、弱者を大切にすること、ぜひ一本化を、一本化で絶対安倍は辞めさせる、という方向でがんばってほしいなというふうに思っています。よろしくお祈りします。(拍手)

発言者 H (女)

さっき、「20代、30代がなんで自民党？」という話で、そこでちょっと手を上げようと思ったんですけど、ちょっと時間がなくて遠慮したんですけど。私は北海道の和田さんの街宣を Internet で聞いていて、その時和田さんが「今、5人の人にたまごが3個しかない。みなさん、3個を5人で分けるのはいやですよ。私は3個を6個に増やします。そうすればみなさんに1個づつ行きわたって、残りの1個を福祉にあげます。」そういう話をしていて、結構それが彼にしては重要なことのように、ほんとなんかイイカゲンな話ですけど、それが彼があちこちで話している話だと思うんですけど、でも、それってなんていうか、20代、30代に受けると思うんですね。やっぱり、増えないと、「増える」という話をしてもらわないと、20代、30代というのはこれから結婚して子供を産んで、お金かかる、家も買いたい、とそういう年代の人たちにとって、その「3個を5人で分ける」というのは、ちょっと夢がなさすぎて、やっぱり池田真紀さんは、夢みたいな話ではなくて、「現状3個しかないのを、これをどうやって回していこうか」という話を、堅実な話をしてたと思うんですけど、多分、特に男の人とか、30代ぐらいのこれから上に向かっていかなきゃなんない人にとっては、そこが物足りない。だから私さっき落合さんが話してた、公益資本主義？、なんかやっぱりちょっと夢のある経済政策？、それを選挙まで時間ないけれど、共産党と民進党でそれをこううまく、なんか作っていくのはむずかしい、とてもむずかしいと思うけれども、やっぱりこういう経済政策っていうのを、「野党は使うことばかり」というのを聞いたことがありますよね、みんなで分ける話ばかりを言っていて、増やすことを考え話さないと、やっぱり増やす話をしてくれないと、私たち、私ももう50代なんですけど、もうこれから引いていくっていうか、夢もあんまりなくなってきたというか、やっぱりこれから20代、30代の人たちは、経済、増やしていくという話がないと、どうしても、どんなに原発とか安保法制いやだと思っても、やっぱりアベノミクス増やしていくんだな、と思って、そっちに行っちゃうんじゃないかと思います。(拍手)

発言者 I (高校教員) (男)



貧困が進めば進むほど、保守化は進みますよね。いわゆる中間層が没落をして、貧困化が進んでいる、特に若者の間で。それがですね、保守化を進めているんですね。私は高校で、定時制で、ここ十年近く教えていますから、例えば少年院に入った子供がですね、まあ2ヶ月3ヶ月少年院に入って、帰ってくると体が一回り大きくなっているんですね。「おあ、おまえ、大きくなったなあ」という話をするんですけども。やはり、貧困と犯罪は直接結びつきますから、少年院に入って、きちんと三食を食べ、きちんと運動をし、そして睡眠をとれば、やはり成長してくるんですね、彼らは。こういう状況が日本全体でやはりあるんだと思うんです。ですから、若者たちの貧困化は、保守化を進める。やはり、社会の中流の復権ということが言われていま

すけれど、やはり中流がいなくなって上下に分かれている、階層が、これが保守化を進める。これは明らかですよ、世界中でも、証明されてます。ですから、ぜひですね、ここでやはりアベノミクスのこの間違っただ政治を変えていただきたい、ということをお話しさせていただきたい。

それから先ほど、岸さんがとても、ぼくはすばらしいことをおっしゃったと思うんです。はっきり言って、共産党が、私はここまで譲歩してですね、そして話し合いに応じる、と言ったのは、歴史的に初めてじゃないかな、と思っているんです。それぐらいやはり、共産党のみなさんも危機的な状況を考えていて、私たちとそこはまったく共感できる。私たちは、ぜひ、この5区・6区で候補者調整の話し合いに入りたい。衆議院選挙は、同日選挙はなくなってます。ぼくは、やるんだ、と。それじゃないと、安倍の今後はないですから。彼はやります。ぼくはそういうふうには思ってますけど。ぜひとも、ですね、全国にさきがけて、この東京5区・6区で話し合いに入りたい、その素地はあると思う。そして私たちはそれに対して、全面的に支持しますし、そのうえで私たちが、やはりいま市民が政治に目覚め始めている、じゃ私たちが何ができるのか、共産党や民進党やその他の政党に対して私たちが何ができるのか、何をやってほしいのかということも、ぜひそちらの方からですね、出していただきたい。全面的にわたしたちも協力させていただきたい、いうふうに思います。(拍手)

発言者 J (男)

世田谷に住んでいます。沖縄の人間、ウチナンチュです。私がこういうことにかかわるのは、辺野古の新基地の問題で、まず政権交代をしてもらわないと、今の沖縄県民の声を止めない受け皿がないから、なんとか政権交代を果たしてほしい。そのために、野党がバラバラのままではなくて、候補者を一本化して、安倍政権に対抗できるような形を作ってほしい、という動機でずっとかかわっています。この間の北海道の補選の総括も含めて感じるところなんですけれど、イケマキさんという、生活保護を受けられていてソーシャルワーカーになられた、その候補者をしてですね、その、いまフロアからも出ました、貧困の問題に対応する訴えを彼女はしていたんですけども、結局無関心層の壁というのはものすごい厚かったわけで、投票率も上がらなかった。その事実というのはわたしは非常に強く受け止めなければいけないと思うんですね。今後とも、投票率投票率とよく言われるんですが、私たちがいま、これから闘っていくための課題というのが、投票率が上がらなくても、それでも勝てるだけの体制を作る、先ほど岸さんがおっしゃいましたけど、落合さんの票と岸さんの票を足せば6区では自民党の候補を凌駕するだけの票数には形の上ではなるんですけども、それをどういうふうにも実質化するのか、私たちの課題というのは、共産党の票と民進党の票と、あとその他野党の票、というものを、あわせた数以上の得票する、ということが、この本当に野党共闘というのが実質化して、無党派層の方にも受け入れられるような形になると思うので、そういうことのために今後とも、実質的な政策協議のテーブルに、私たちが市民の立場からそういった政策協議を行うための媒介になっていければと思っていますので、ぜひ、ほんとに投票率が上がらなくても勝てる闘いを着実に進めていきたいなと思っています。(拍手)

発言者 K (男)

私たちは地元で、タマリバーバスとか東急線の問題を取り上げてやっていたんですけど、去年の暮れから「戦争法を廃止させる玉川連絡会」というのを作っています。それがだんだん発展してきま

して、みなさんのチラシの中に入っているんですけど、6月5日に「みんなの自由ヶ丘だいこうしん 平和に一票」。これはたまたま、私は世田谷の方なんですけど、自由ヶ丘で街頭署名なんかやっていると、自由ヶ丘は目黒なんですね、目黒の人たちとも一緒に運動をして、自由ヶ丘ではおそらく戦後はじめての自由ヶ丘の駅をぐるりと回るような大行進をやる、ということなんです。こういう運動をはじめてだから参加しようかなという子供からお年寄りまでみんな、手塚さんなんかには来て頂いて是非 初めてのこういうことをやってここに参加して、「あっ、こんなことやるんだ」ということを見て、政治に関心を持つ。私たちも「平和に一票」、「選挙に行こう」「野党は共闘」、ずっと宣伝で訴えてきたので、その延長でぜひ成功させたいと思いますので、みなさんよろしくお願ひします。(拍手)

発言者 L (男)

いろいろお話を聞いててつくづく思ったんですけど、ひとつは、私も古い人間ですから空襲を受けたりしたんですから、戦争反対というのはよくわかる。しかし、いまみなさんの話を聞いてて思ったのは、いかに若い人というか、どうやったら多くの人たちを結集することができる



か、というのが結論が出ないままにきてます。もちろん、これは大事なことです、結論はなかなかでないと思いますけど。そこで私がちょっと思ったのはですね、世田谷には結構有名な文化人がたくさん住んでいるんですね。たとえば、これは古い人間ですから植木等はもう死んでいる。

(笑)若い方でAKBの何か女性がいるか、これもわかりませんが、確か山田洋次とかいう監督が、彼なんかもいますね、音楽家で池田晋一郎。これはあまりにも有名だから若い人が来るかどうかかわかんないですけど、いずれにせよそういった文化人の人が「統一して今の危険な状態を変えようじゃないか」という、そんな文化体制みたいなものを、この市民連合が軸になって、どこが軸になってもいいんですけど、それを看板を掲げて呼び寄せるとちょっと違うんじゃないか、という感じを持ちます。

それからもうひとつは、2000万署名とかということで、戦争反対というものもいろいろ聞きます。私もしゃべれって言われると「増税は戦争前夜」とかね、そんなこと古い言葉で言ったりするんですけど、たしかに増税するというのは、戦争始めるとき、だいたい昔からそうですね。落合さんが銀行マンだそうですから、経済に相当詳しいだろう、と。私なんかは「かぶ」というと八百屋さんしか思い出さないんですけど。(笑) やっぱりね、アベノミクス、みなさんは頭いいからいろんなことを知っているんでしょうけど、アベノミクスというか経済政策が、これがいかにどんだけ貧乏人を作っているか、あなたたちの給料が削られているか、それからいま言っている、彼が言っているのは、古い昔からわたしが労働組合員だった時にかじった「パイの理論」あれをいま言っているわけです。そういうわけでね、落合さん、経済のことをよく知っているんだと思いますから、われわれも戦争反対はいいんですけど、憲法もいいんですけど、安倍の経済論を打ち壊すそういう演説をしていただきたい。(拍手)

発言者 M (目黒9条ネット事務局) (男)

戦争法との関係で、9条がほんとに壊されつつある、これはいかんというわけで、九条の会、全国の事務局長からも何回か新しいメッセージが出されました。今日、ほんとにみなさんおっしゃっているように、政治がひどすぎる、3年くらい前に共産党が「安倍内閣の暴走」と言った時には、暴

走ってという言葉はちょっときついんじゃないのかな、と私自身は思ったんですけど、その後はほんとに暴走に次ぐ暴走だと、いうふうなことをつくづく思っています。ですからもう、待たなしたんだ、というところをですね、政治も経済もあわせて、立候補を考えていらっしゃる方は、身に染みてそれだけ感じてもらいたい。ですから、本当に近々気持ちの良い一本化というものができる、候補者だけが気持ち良くなるんじゃないくて、(笑)ほんとに市民が「あ、これなら！」という候補者の方、それを支える政治組織のみなさんがつくづく身に染みて思っていたきたい、いうふうに思います。ひとつだけ具体的なことを言って恐縮ですけど、手塚さんの先ほどのご挨拶に、「個人的には私は憲法が大事だと思うし、安保法制には…」というおっしゃり方をされたんですけど、もうそういう「個人的には」というアタマをつけずに、政治家として政党として、そして、その法律をつくるためにしっかりとした協議するために、力をつくしていただくというふうに、ぜひ、「個人的」でなくやっていただけたらと思います。(拍手)ほんとに最初お話しいただいた、岡田さんのご苦勞とか、そんなことに応えられる市民運動になるだろうと思います。最後に、先日の目黒の区長選挙で、世田谷の関係の方にも勝手連というかたちを含めまして、ご尽力いただきましたことに関して感謝しますとともに、今度の5・6区の成功が進むように、私も協力いたしたいと思います。(拍手)

発言者 O (男)

目黒区の小泉一(こいずみ はじめ)と申します。(拍手)17日投票で目黒区長選挙が行われまして、私立候補いたしました。先ほど、宮本さんからもお話がありました通り、4:6ということで、私、22,814票を獲得いたしました。(拍手)現職を追い詰めることができました。立候補に当たって私は、「この選挙は勝てるかもしれない」、「楽しくやりたい」、「面白くさせてやるぞ」というぐらいの気持ちで友人とも話をして、選挙戦に入りました。残念ながら、目黒区はちょっと弱いのかもしれませんが、野党は共闘、市民連合ということを目指しましたけれども、政策協定を結んでいただいたのは、日本共産党、区政を変えよう目黒区民の会、その二つの団体と結ばせていただきました。残念ながら社民党さんも、民進党さんも現職の候補を推薦されたわけでありすけれども、しかし私が立ち上げました「区政をただそう 目黒プロジェクト」、この団体を設立いたしましたところ、個人の方、それから様々な団体の方が集まっていたいて、盛り上げていただきました。特に、めぐろ・せたがや勝手連のみなさん、ママの会、駒場の若いお母さんたち、そういう方たちを軸にしながら、いろんな個人の方にも広がって、ほんとに楽しい選挙ができたと思っております。投票日、接戦でスタートしましたがけれども、残念ながら一万票差が開いてしまいましたけれども、ほんとに私は闘ってよかった、というふうに思っています。めぐろ・せたがや勝手連のみなさんも、私が弁士の方の間、手を振ってやっているんですけど、右手だけだと疲れるので、左手に変えたりするんですけど、そのうちに私の耳元ささやいて、「笑って笑って」というふうにささやいているんですね。(笑)そういう形で励まされながら、闘いを進めることができました。本当に市民のみなさまの、そういう支えがあつての、4:6の接戦に持ち込めたのだと思っております。



これから5区・6区の市民連合めぐろ・せたがやが発足する、しかも私が選挙戦を闘っている4月1日からこれができるということでありますので、これは、目黒でそういうものがほんとにあった

ら、一万票差を逆転して、ほんとに勝利できたんじゃないか、という気持ちで、明るい気持ちで私もすがすがしくいま過ごしているところであります。本丸はやはり、安倍政権打倒でありますので、その点ではこの5区・6区がほんとに団結をして、取り組んでいく、ということがすごく大事だと思います。若い人たちの話がありましたけれども、若い人たちもほんとに対話をして話をしていけば、現実をきちっと見ていきますし、いまSEALDsですとかいろんな若い人たちが積極的に自分の意思で行動するようになっていきますよね。ですから、そういう対話の活動なんかもぜひ取り入れていただいて、ほんとに私の選挙でもそうですけど、無関心層をどう掘り起こすのかがすごく大きな宿題となっておりますので、私も微力ですけど、がんばっていきたいと思います。(拍手)

発言者 P (女)



選挙の対策についてなんですけれども、無党派層もなんですけれども、高齢者の人がすごくみなさん選挙に行かれるので、とても多いと思うので、そちらの方もすごく大事だと思ひまして、(笑) 高齢者の人がいいというか、いいなと思える社会が、やっぱり若者にとってもいい社会になっていくと思うので、そのような、なんかこうつながっていくような、そういうようなわかりやすい、やっぱり具体的な政策、未来が描けるような、あのバラマキとかではなくて、ほんとにやさしい社会になるような、そういうのを描いていただければと思うのと、あともう一つ、経済のいいのを、具体的な公約にあったんですけど、見ていますとすべてなんか改悪されていて、やっぱり民主党さんていいことを言っていたのも改悪になったりとか、子供関係のも、さきほどおっしゃっていたみたいな不登校の子たちがなんか管理されるみたいな、恐ろしいことが知らされて、報道もしないし、知らされてないので、この選挙の時に、ほんとに安倍政権が政権取ったらどんな怖い社会になるか、というのを、みんな知る機会にもなるので、そういうところもお伝えいただけて、それをどうするか、とか、そういうふうになったら、いいのかなと思ったのと、私、いつも駅前で手塚さんががんばってらして、見てましたし、私子供たちの保育園の時、ほんとに共産党の方の政策で、私まだ子育て中で良かったな、というか、みなさんががんばってくださったので、野党の方といつもお会いしていて自民党以外に入れてたんですけど、共闘ってほんと大変なことだと思うんですね、やっぱり意見違って、これができたってすごいことだと思うので、市民もちょっとした枝葉のことで、これはああだこうだと言わずに、もうほんとに応援していくという、その一つになってやってくれれば、と思っています。(拍手)

発言者 Q (カウンセラー) (女)

若い20代、30代の方たちが選挙に無関心で、投票に向かう率が低いということが、いま話題になっております。40年にわたって不登校・引きこもりの相談をやってまいりました。うちを居場所に生活する子供たち、それから学校へ行かない子供たちは政治に大変興味があり、関心があります。なぜならばうちにおいて、テレビを見、新聞を読み、そしてインターネットの世界を熟知しておりますし、世界の情報にも詳しいです。ただ、なぜ選挙に行けないかといと、投票所が学校だからです。

(笑) 学校が投票所である限り、学校には行かれない。それはなぜかといえば、先生方の不適切な指導で大変傷ついている、だから学校には行かれない、というふうなことがあるんですね、投票所が学校以外の場所だったら投票に行けるといふ子供たち、若者たちが実に多くいます。不登校の子

供たちは一年間に12万人と言われますけども、10年間で延べにして120万人です。不登校対策が強化されてから今年で25年になります。まさにその世代というのは、うちにおいて政治に関心を持ち、なんか非常に考えているんですけども、投票に行くという最後のところにたどり着かない方たちが多いですね。ですから若者たちを投票に、ということを考えるときには、学校以外の場所も投票所としてちゃんと設けていただきたい。そうすると、選挙に行く、若者たちが増えると思います。本当に政治に関心がある者たちが社会の中で参加しやすいいろんな方法をぜひ考えていただきたいと思います。(拍手)

発言者 R 練馬 (練馬 みんなで選挙) (女)



練馬区に住んでおりまして、今日はチラシを拝見して、こちらで勉強させていただこうと思って参りました。つい1週間ぐらい前に、私たちも「練馬 みんなで選挙 (略称「ねりせん」)」というのを始めました。お煎餅ではないんですけども。(笑) 今日、5区・6区の方々がどのようにして、野党共闘を進める

市民の動きを作っているのか、お聞きしたくて来たのでほんとに勉強になりました。ひとつ、主催者の方かもしれないんですけど、お聞きしたいんですが、ねりせんはいろんな市民の方が集まっているんですが、「総選挙勝利をめざす」ということで、書いてあるんですが、私たちの認識としては、一応同日選挙がないのではないのか、という前提で、ないんじゃないかな、というふうにやや傾いた認識で始めた、まだまだ2回目の会合を持ったばかりなんですけど、会の中にはやはり、まず参議院選挙で勝つのを大事にしよう、ということで、私たち最初まず衆議院選挙の一本化、9区・10区での野党一本化をめざして、市民がぜひ政党間で調整をしていただけるように後押し、押し上げる動きを作っていきたい、というその一点でやろうとしているんですが、そこたくさんさんの党派、参議院選挙とのからみが、私たちも初めてでよくわからないので、市民連合の方でもいいんですけど、ちょっとその辺についてどのように認識しておられるか、教えていただきたいと思います。

鈴木さん

めぐろ・せたがやの方で論議しているのは、当然6人区ですから、それぞれの党派から候補はだされますし、それぞれがやっぱり自分の主義主張にあったところを応援し、投票するでしょうから、それはそれ、私たちが力をあわせてやるべきは、衆議院の方の一本化だろうということで、割と早い段階で、それは見切ってます。

発言者 S (女)

6区に住んでおりますじゅん子といいます。この間最高裁で夫婦別姓の選択制さえ認めない、というようなことが決まりまして、腹が立つなあ、とか思って、一人ちょっと名字を言うのをさぼったりとかして、抗議の運動をしています。

自民党は、若い人たちに向けて、いま「同一労働同一賃金」とか言っています。実は多分、正規の賃金を下げちゃう、という結果にしかならないんじゃないかな、というふうに思ってる人も少なくないと思いますけれども、そのことも含め、この日本というのが武器輸出や原発の輸出をしない、と成り立たないんだ、というようなイメージも広がりつつあると思うんですね。そのあたりを、落

合さんの「国政報告会、6月11日の夜、成城ホール」というのが配られた中に、なななんと衆議院議員の細野先生も見えるらしい。電事連、電気事業連合会の動きにも大変お詳しいと思いますので、そういう原発輸出の道ではない、別の、日本のそれこそ公益資本主義とか、エネルギーシフトの方向での話し合いをがんばってやっていただきたいな、というふうに思っています。それと、わたしたちお金の使い方というのが、ものすごい大事だと思っていて、SEALDsも「みんなのくらしに税金つかえ！」っていうコールをやっていて、すごい私も感動して大きな声で言っちゃってるんですけど、パナマ文書問題とか、これからどんどん暴露されていくと思いますが、本当に払われるべき税金が払われない、みんなのために使われるべきお金が隠されているということを、わたしたちは本当にちゃんと知らなきゃいけない、というふうに思います。思いやり予算のことだって全然ロクに知らなかったということで、なんとほんとに落合さんの国政報告会と同じ日なんでびっくりしちゃったんですけど、みなさんにお配りしたチラシの中に、カラーで思いやり予算の映画の上映会のチラシを入れております。6月11日の同じく夜に下北沢の北沢タウンホール11階らぶらすの研修室3でやります。特に、思いやり予算についてお詳しい方もたくさんいらっしゃると思いますので、そういう方は落合さんの方へ行っていただいて、あんまり詳しくない方は映画「ザ・思いやり」へおいでください。私も映画を見てびっくりしまして、私が思っていた以上にひどい、ということがわかりました。この両方にみなさん、今日参加されました方、周りの方もお誘いいただき、ぜひご参加ください。(拍手)

3) 5月・6月の運動イメージ、行動計画を志村徹磨さん(共同代表)から報告

① 4/30の集合写真を載せたチラシを作るので、これを区内から全国に配り、拡散するので協力してほしい。衆議院選挙295の小選挙区での勝利を目指すことが、第一の目標。



② めぐせたの会議を、主として太子堂区民センターで毎週行う。5/8、5/15、5/21、5/28そして5/30には大きな集会をおこなう。5/30の集会までの1ヶ月に、参議院そして衆議院選挙でも野党共闘の成果をあげ、相手方が震えあがるほど、「今度は勝てるぞ」という状況を作り上げることが一番のかぎ。5区・6区から形を作り上げよう。

③ それぞれの地域で闘うとともに、政党本部が腰を入れて、最低、選挙協力をやることできるように絶対させること。295の小選挙区での協力ができるには全国政党の間での話し合いがないと絶対できない。これを必ずやらしてもらうために5/19 13:00 衆議院第一議員会館1階多目的ホールで総決起を行う。2000万人署名提出の集会が行われるが、その後、全議員に対してロビイングを行って、野党候補一本化の市民の声を直接届ける。

6月は、上記の5月行動をうけて、力をあわせて行動していく。

4) 集会宣言採択

鈴木さんから、今後の行動に関して下記3項目の再確認。

- ① 国会議員に対して、われわれの活動が進んでいることを届けること
- ② 広く区民に、われわれの活動を知らせていくこと。「みんなで応援して、今度は勝てるよ」と宣伝していくこと。
- ③ 一本化するための政策協議を進めること。

集会宣言（市民と政党の人との一種の約束）を水野真由子さんが読み上げ、採択された。

「戦争する国にしないために、野党候補者を一本化して勝利しよう！」

(1) 私たちは主権者として基本的な人権がまもられ、平和に暮らしたいと強く望んでいます。しかし憲法を守らない権力者によって、民主主義・立憲主義が今、危機に瀕しています。集団的自衛権の行使を容認する閣議決定、安保法制によって日本は戦争のできる国にされようとしています。

(2) これらの安倍政権の暴走を阻止するために、衆議院東京5区・6区において、野党候補を一本化して選挙で勝利することが必要と考えます。

(3) そこで民進党、共産党、社民党、生活の党など安保法制に反対する政党、個人は、「市民連合めぐろ・せたがや」をテーブルとして、政策協定作り及び候補者の一本化に関して協議を開始します。政党本部や全国との関係もあるので、現時点で結果の約束はできないことですが、この方向で努力をすることこそが、有権者の期待と支持を喚起し勝利へつながる道です。

2016年4月30日 集会参加者一同

5) 集合写真撮影をおこない、閉会した。

以上

(記:高橋知文)